

## 第 1 部

### □ 早春譜

中田 章／藤掛廣幸 編

“ 春は名のみ風の寒さや 谷の鶯 歌は思えど 時にあらずと声も立てず 時にあらずと声も立てず ”  
原曲は大正 2 年に発表された吉丸一昌作詞、中田章作曲の日本の唱歌“早春賦（そうしゅんふ）”です。  
作詞の吉丸氏が長野県安曇野を訪れた際、穂高町あたりの雪解け風景に感銘を受けてこの詩を書き上げたそうです。  
この『早春譜』はイ・ムジチ合奏団のアルバム「日本の四季」の為にアレンジしたものをマンドリンオーケストラの為に書き直しました。

### □ 宵待草

多 忠亮／藤掛廣幸 編

“ 待てど暮らせど来ぬ人を 宵待草のやるせなさ 今宵は月も出ぬさうな ”  
大正浪漫を代表する画家・詩人である竹久夢二によって創られた詩歌に、多忠亮（おおのただすけ）が曲を付けました。50 年たらずの短い生涯にわたり恋多き夢二でしたが、実ることなく終わったひと夏の恋の想いがこの 3 行詩に込められています。植物学的には“宵待草”は存在せず、待宵草（マツヨイグサ）が正式な呼び名だそうです。  
この曲も『早春譜』同様、マンドリンオーケストラの為に書き直したものです。日本人の心を代表するこの 2 曲、それぞれの曲想の違いをご堪能ください。

### □ ディスコ・モスクワ

吉田剛士、湯浅 隆／内藤正彦 編

日本におけるポルトガルギター（ファド）のパイオニア、湯浅隆とマンドリン奏者吉田剛士によるアコースティックユニット“マリオネット”のオリジナル曲です。軽快でありながらどこか哀愁を感じさせるサウンドが今まで味わったことの無い不思議な空間を作り出しています。

### □ 夢は黒潮に乗って

湯浅 隆、吉田剛士／御崎 恵 編

1999 年放送 NHK ドラマスペシャル“海に帰る日”の主題曲で、こちらもマリオネットのオリジナル曲です。太平洋の暖流“黒潮”のゆったりとした流れを思い浮かべながらお聴ください。  
『ディスコ・モスクワ』も、『夢は黒潮に乗って』もマンドリンオーケストラ用に編曲されたものであり、元となったデュオ演奏の曲想とはかなり違ったものになっています。機会があればその違いを聞き比べてみたら如何でしょう。

### □ 彷徨える霊

U. Bottacchiari（ウーゴ・ヴォッタキアリ）

幻想的でロマンに溢れる作風により世界中のマンドリニストに愛されているウーゴ・ヴォッタキアリの作品です。曲名の『彷徨（さまよ）える霊』は宗教的意味合い（鎮魂歌）を込めてなのか、比喩的な標題音楽なのか、作曲背景は定かではありません。

マンドチェロによる冒頭の旋律は和声の微妙な変化をつけながらマンドリンに受け継がれて行きます。不安、焦燥、優しさ、など様々な情景を見せ Grandioso に向かって各声部は交錯した和声を展開し、やがて最高潮に・・・。

高揚するロマンの薫りは、かの「イル・ヴォート」や「交響的前奏曲」「夢の魅惑」の手法にそっくりです。

総譜には interlude とあるようにわずか 92 小節の「間奏曲」ですが、短い中にも一つのドラマがあり、潮が引く様に静まっていった後の沈黙は何とも言えない余韻を残します。

## 第 2 部

### □ 弦楽セレナーデ Op11 第 4 楽章

Dag Wirén（ダグ・ヴィレーン）／小穴雄一 編

ダグ・ヴィレーンは、1905 年、スウェーデン生まれの作曲家で、オペレッタや 5 つの交響曲、管弦楽曲、ピアノ曲から映画音楽など幅広い作曲活動をしました。

本日はその中でも特に有名で、彼の代表作と言われる「弦楽のためのセレナーデ」より第 4 楽章をお送りします。この曲は、慶応義塾大学マンドリンクラブの常任指揮者として精力的に活動し、他グループの指揮や編曲で独創的な表現力を追求している小穴雄一氏により編曲され、国内でも広く演奏されています。

セレナーデとは「夜に恋人の窓辺で歌う愛の歌」が語源とされる多楽章からなる器楽曲ですが、この第 4 楽章は副題がマーチとなっており、軽快さの中にも恋い慕う人の思いが通じれば幸いです。

### □ ダンテとベアトリーチェ

C.Graziani-Walter（カルロ・グラツィアーニ・ワルテル）／中野二郎 編

19 世紀末のイタリアでマンドリン音楽が興隆した頃、フィレンツェの皇后マルゲリータ陛下マンドリン合奏団の指揮者を務めていたカルロ・グラツィアーニ・ワルテルの作品です。

この曲は、ワルテル自身が結婚式を挙げるに際し相手に贈ったもので、愛する花嫁に対し「ダンテとベアトリーチェの物語」のような未来永劫変わることのない愛を表現しています。

この曲の楽器編成は二十種ほどありますが、本日は小編成マンドリン合奏用に作られたものをお送りします。

### □ 幻想曲「華燭の祭典」

Giuseppe Manente（ジュゼッペ・マネンテ）／中野二郎 編

イタリアの作曲家ジュゼッペ・マネンテの作品で、1903 年、歩兵第 3 連隊軍楽長となったマネンテの作曲意欲の最も旺盛な 37 才頃の作品です。

この時代のマネンテの作品は吹奏楽の力作が多く見られますが、本曲はその流れを汲みながら、マンドリンらしい繊細な旋律も醸し出している 3 部構成の大作です。

- ◆ 第 1 楽章「人々の祝福」  
不完全小節から始まり、これに続くリズムカルなシンコーションの旋律が凝集された魅力的な楽章です。
- ◆ 第 2 楽章「教会にて」  
静かに重々しく始まり、徐々に気分を盛り上げ、ついには宗教的感動まで達する華燭の典の最高潮となります。
- ◆ 第 3 楽章「家族の祝宴」  
一転して軽快なメロディーとなり、家族の喜びがあふれています。  
曲想もテンポもめまぐるしく変わり、高度な技術が要求される楽章でもあります。そして、興奮の頂点は第 1 楽章の主題が再現され、ヴィヴァーチシモで堂々と終ります。

## 指揮者プロフィール

### \*大久保 學\*

一見すると華麗なタクト、実態は気まぐれな指揮で部員を翻弄する迷指揮者。今回は第 1 部で観客のみなさまを翻弄します。乞うご期待。



### \*堀口 敬佳\*

指揮者であると共に全ての楽器を弾きこなすマルチプレーヤー。よってどのパートの間違いにも鋭い指摘が…。本日は第 2 部で感性豊かな指揮を披露します。

